



# 翔とぶ梅

濱次お役者双六 三ます目

田牧大和  
Tamaki Yamato





講談社文庫

常州大学図書館  
蔵 翔と梅 章  
次お役者双六 三ます目

田牧大和

講談社

著者 田牧大和 1966年、東京都生まれ。2007年「色には出でじ 風に  
牽牛」(『花合せ 濱次お役者双六』に改題)で第2回小説現代長編新人  
賞を受賞し、作家デビュー。以後、約5年間で14冊の新刊を上梓するな  
ど、精力的に執筆を続けている。他の著書に『泣き菩薩』『三悪人』『緋  
色からくり』『身をつくし 清四郎よろづ屋始末』『数えからくり 女錠  
前師<sup>ひな</sup>緋名』『散り残る』『春疾風 続・三悪人』『三人小町の恋 偽<sup>いかさま</sup>陰陽  
師 拝み屋雨堂』『とんずら屋弥生請負帖』『ほそ道密命行』『質草破り  
濱次お役者双六 二ます目』『盗人』がある。

と うめ はまじ やくしやすごろう み  
翔ぶ梅 濱次お役者双六 三ます目

た まきやまと  
田牧大和

© Yamato Tamaki 2012



講談社文庫

定価はカバーに  
表示してあります

2012年12月14日第1刷発行

発行者——鈴木 哲

発行所——株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21 〒112-8001

電話 出版部 (03) 5395-3510

販売部 (03) 5395-5817

業務部 (03) 5395-3615

Printed in Japan

デザイン——菊地信義

本文データ制作——講談社デジタル製作部

印刷——豊国印刷株式会社

製本——株式会社大進堂

落丁本・乱丁本は購入書店名を明記のうえ、小社業務部あてにお送りください。送料は小社負担にてお取替えます。なお、この本の内容についてのお問い合わせは文庫出版部あてにお願いいたします。

本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することはたとえ個人や家庭内の利用でも著作権法違反です。

ISBN978-4-06-277428-4

## 目次

とちり蕎麦

7

縁よすが

79

翔とぶ梅——香風昔語り

277

解説 東えりか

319



講談社文庫

と  
翔ぶ梅

濱次お役者双六 三ます目

田牧大和

講談社



## 目次

とちり蕎麦

7

縁よすが

79

翔とぶ梅——香風昔語り

277

解説 東えりか

319

## 鳴り物（な——り——もの）

歌舞伎などの中で演奏される、三味線を除いた楽器。大鼓・小鼓・太鼓・笛・大太鼓が中心となる。本作に登場する舞踊「翔ぶ梅」は、この鳴り物のみで構成され、台詞や長唄など物語を直に伝える術がないため、難曲中の難曲とされる。

翔ぶ梅——濱次お役者双六 三ます目——



とちり蕎麦



おかしな間が、空いた。

濱次は、目の前にいるはずの二枚目立役、野上紀十郎へそろりと目を向け、ぎよつとした。

江戸は木挽町に本櫓を構える芝居小屋、森田座の新作狂言、『梅連歌』真っ只中のことだ。

春らしい華やかな演目を、と、座元の当代森田勘弥が毛色の違う和事を三作、森田座自慢の立作者、大竹松馬に書かせた。並べて一度に興行に掛けたところ、なかなかの評判になっている。

『梅連歌』は、そのうちの一本で、怨霊事——幽霊や物の怪が出てくる狂言が大好物の濱次にしてみれば、「惚れた腫れた」だけで進んでいく、捻りもお化けもない、取り立ててどうということもない話だ。

その狂言ただ一つの見どころが、紀十郎演じる「叶わぬ恋に苦しむ若侍」という訳だ。同じ舞台に立っている濱次でさえそう思うのだから、客たちの入れ込み様はただごとではない。

その、『梅連歌』で要かなめの紀十郎が。

芸に厳しく、どんな時でも一分の隙すきもないはずの二枚目役者が――。

素すに戻もつちまつてるじゃないか。

場は、「恋こほしい女に会えぬならせめて文をと、顔見知りの女中に橋渡しを頼むもの、拒こほまれて嘆なげく」というところ。若侍は「苦しげに肩を震ふるわせ、俯うつむいている」はずだ。

なのに、紀十郎の男前の顔は真まっ直すぐ女中役の濱次に向いていて、形の良い切れ長の目は、呆あつけ氣にとられた形に見開かれ、濱次の左耳辺りをすり抜けた先へ当てられている。

自分の後ろに何があるのだと、危うく振り向きかけて思い止まる。紀十郎に付き合つて素に戻もっている暇はない。そろそろ「思いつめた顔を上げ」、見まえること、叶なわぬなら――』という台詞せりふが入るはずだ。

客たちは、固唾かたすを呑のんで紀十郎の芝居を見守っている。だが、幾度もこの狂言に足を運んでいる紀十郎びい、鼻はなが、妙だと思ひ始める頃だ。

濱次は、矢も楯たても堪たまらず口を開いた。

『エエ、もしや。もしや、その文をお嬢様になぞと仰おつしやるのでは、ありますまいな

ア』

口許に軽く指を当てる。じわりと半歩後ずさつて、胡散臭げに若侍を見る。

濱次の咄嗟の芝居、苦し紛れの捨て台詞——その場でこしらえた間に合わせの台詞に、紀十郎が我に返った。すぐに面を引き締め、濱次の芝居を受ける。

『我が想いは、この梅の香と同じ。そなたならば口に出さずとも、分かるうものを』  
さすがは紀十郎、哀しげな声音に、想いを品よく匂わせる言葉の選びよう。同じ捨て台詞でも、濱次の取つてつけたようなものとは出来が違う。

そこから台帳通りの台詞へと繋ぐ滑らかな流れも圧巻だ。ここまでくれば、後は紀十郎の見せ場が待っているのみだ。さつそく、女客の溜息がこここで聞こえてくる。

水も滴るいい男つてのは、こういうのをいうんだらうねえ。

濱次はこつそり感心しつつ、再び動き出した狂言に胸を撫で下ろした。

「皆さん方、紀十郎さんからの『蕎麦札』でございやす」

紀十郎付の奥役、新八が陽気に告げると、中二階がわつと沸き立った。

『とちり蕎麦』といって、舞台でとちった役者が、その詫びとして楽屋中に蕎麦を振る舞うのが、江戸の芝居小屋の慣わしだ。

配られた蕎麦の引き換え札を見て、大部屋女形たちのかしましさに拍車はくしやが掛かった。

「ちよいと、紀十郎さんの蕎麦札は、やつぱり『峰屋』だよ」

「おやまあ、本当だ。よし、こないだはかけにしたから、今日は冷たいぶっかけにしてみよう」

「なんだい。遠いの寒いのと文句を言つてたくせに、随分な変わりようじゃあないか」

「煩いね。少しくらい遠くたつて、不味いより旨い方がいいに決まつてるだろう」

濱次は、わいわいと賑やかな言い合いから少し離れて、手元の蕎麦札を見つめた。目敏い大部屋仲間の歌江が、濱次の肩越しに覗き込んでくる。

「どうしたんだい、辛気臭い顔して」

歌江へ視線を遣らぬまま、濱次は呟いた。

「う、ん。これで二度目だな、と思つてさ」

いつも歌江とつるんでいる菊蔵が、早速話に加わってくる。

「そーいやあ、珍しいよね。紀十郎さんが、立て続けにとちるなんてさあ」

濱次は、小さく頷いた。

紀十郎は、端正な顔立ちと高潔な佇まいが売りの役者だ。佇まいのみでなく、普段

の振る舞い、芝居に臨む心構えも、高潔そのもの。みつちり稽古けいこをこなし、台詞、所作、舞踊、全て初日には隙なく仕上げてくることで名高い。

その紀十郎から、同じ狂言で二度も『とちり蕎麦』が振る舞われた。さらに気になるのが、とちった折の顔つきだ。あれは、すっかり素に戻っていた。普段の紀十郎なら、あり得ない。

濱次の物思いを遮さえぎったのは、酷ひどく不機嫌な甲高い声だった。

「濱次って中二階は、どこのどいつだい」

声こゑのする方、開けっ放しの大部屋の襖ふすまあたりを見遣ると、目尻を吊り上げた名題なだい女形おやま、市田瑞駒みずこまが浴衣姿で立っていた。『梅連歌』で、紀十郎の恋の相手を演じた男である。

ありやりや。また、怒らせちまったみたいだね。

けれど、瑞駒がなぜ怒っているのか、見当がつかない。今日の芝居を振り返ってみても、瑞駒の足を引っ張った覚えはない。同じような間合いや動きで、昨日までは何も文句は言われなかった。

「はあ。あたしでござんす」

おのずと、濱次の返事は気の抜けたものになる。瑞駒は、見回していた視線を濱次に当てると、薄く形のよい唇をくいと歪ゆがめ、大きな舌打ちをした。